

「草木染めと織り」に参加して

千葉県立佐倉高等学校 工芸担当 轡 孝之

毎年、夏が来ると今年の実技研修は何だろうと初任の時からワクワクしていたものです。今年は海のそば、長生高校で草木染めと織り。ご指導いただくのは染織に関しては後にも先にもこの人をおいては語れない稗田昭子先生です。

会場である長生高校工芸室には、すでに女性の先生方が多く集まっており、おじさんとしてはちょっとドキドキしてしまいました。



稗田先生の穏やかな微笑みと共に講座は始まりました。まずは草木染めの基本技法を教えてくださいました。絹や木綿の布、羊毛や綿の糸、和紙や籐などを用意していただきました。40～50度の湯の中で素材を繰る作業を充分してから染料に浸します。この作業を「地入れ」といいます。斑無く染めるための大切な作業です。



今回用意していただいた染料は、ミント、茜、紫根、山梔子、コチニールでした。紫根は前日からアルコールに浸して色素を抽出しておきます。他は色素を煮出して使います。



それぞれの素材の扱いやちょっとしたコツなど、やはり経験が物を言う世界ですね。また煮出すときの香りがハーブティのようだったり、漢方薬のようだったり・・・



染浴に浸し込んで地入れと同様に繰る作業を 20 分ほど行います。丁寧に繰っていると手もよく染まります。染めた後で、金属の液を使用して「媒染」作業をします。染料を素材に含ませただけでは染まりません。金属の塩基で結合させてはじめて染まるのです。媒染は明礬（アルミ）木酢酸鉄（お歯黒液なども）塩化第二銅等を使用します。分量は、さすが稗田先生、目測による匙加減でした。また紫根などは、酸（食用酢でも可）を事前に染浴に入れておきます。

媒染は染める前に行う「先媒染」と染めた後に行う「後媒染」があります。それぞれどちらが良いのかは経験による知識でしょうか。

媒染も 40～50 度の湯で 20 分ほど繰ります。

濃い色を染める場合は染浴と媒染を繰り返して希望の色にします。

その後、媒染液が残らぬように充分水洗を行えばあとは干すだけです。

草木染めの染料は大変デリケートなものが多く紫外線に弱かったり、紅花などは高温でも消えてしまいますので、干したりアイロンをかけたりする際には十分注意しなければいけません。和紙をたたんで絞り染めにしたり糸を染めたり色々体験させていただきました。最後は事前に糸をかけておいてくださった機織りにチャレンジした先生もいました。やはり機織りは女性が似合いますね。昔私も準備室で機を織っていましたが、入ってきた生徒が見てはいけなモノを見たと言った表情をしていました。覗かれた鶴の心境がわかったような気がしたものです。

参加したみんなが稗田先生に暖かく包まれたような素敵な研修会でした。準備や後片付け、本当に大変だったと思います。ありがとうございました。良い研修を企画してくれた研修委員の先生方にも感謝いたします。

